



Title	日本語諸方言における推量形式の通時変化：推量から確認要求へ
Author(s)	白岩, 広行
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58528
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【21】

氏 名	白 岩 広 行
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学 位 記 番 号	第 24291 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	日本語諸方言における推量形式の通時変化—推量から確認要求へ—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 渋谷 勝己 (副査) 教 授 工藤真由美 教 授 田野村忠温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語諸方言の推量形式を取り上げてその用法を詳細に記述するとともに、その通時的な変化のあり方にひとつの方向性があること、すなわち、推量から確認要求へと一方向的にその用法が変化する傾向があることを指摘したものである。先行研究のレビューと本論文が採用する分析枠を提示する第 1 部、東京方言を含む各地方言の推量形式を個別に取り上げてその用法と変化の方向を描き出す第 2 部、推量形式と丁寧さの関係を論

じる第 3 部、および、まとめより構成される。本文 145 頁、400 字詰原稿用紙に換算して約 450 枚の分量である。

第 1 部は 2 章よりなる。第 1 章は、1990 年代を中心にして活発に行われた推量形式の共時的研究の成果を展望し、推量形式がもつ用法の分類、用法間の関係の整理などを行うとともに、本研究の目的と立場を述べたところである。続く第 2 章では、同じく推量形式についてこれまで通時的な視点から行われた研究を取り上げ、本論文が採用する分析枠（推量用法、命題確認用法、知識確認用法）を設定している。

続く第 2 部は、この分析枠によって、各地の方言の推量形式の用法と、その通時的な変化のあり方を詳述した部分である。4 章よりなる。まず、東京方言の推量形式を取り上げた第 3 章では、江戸期から現代までの文献のなかで用いられている、ダロウをはじめとする推量形式の使用が、「推量用法と命題確認用法」という「命題に対する話し手の推量」を基本にしたものから、「命題確認用法と知識確認用法」という「談話進行上の確認行為」を中心としたものへと、使用の比重を変化させていく様子を描き出している。またその変化と連動して、推量形式が従属節内に生起する例が減少していくこと、ダロやデショのような短呼形が増加していくことなどもあわせて指摘されている。続く第 4 章では、愛知県岡崎市方言、静岡県静岡市方言、神奈川県茅ヶ崎市方言の 3 つの方言で使用される推量形式（それぞれダラ、ラ、「べ」）を取り上げて、同じ枠組みによって用法の実態と変化の方向を確認したものである。ここでは、方言談話資料と民話資料といった過去の方言実態を明らかにする資料と、高年層と若年層に対する臨地調査を組み合わせることによって、東京方言と同じく各推量形式が伝統的に担っていた推量用法が衰え、命題確認や知識確認などの確認要求用法を中心に表すようになっていく状況を跡づけている。また北海道内陸部方言を取り上げた第 5 章では、当該方言の推量形式「べ」・(デ) ショの担う用法が確認要求用法を超えて、標準語では「デハナイカ」が担う「同意要求」や「驚きの表示」のような用法まで表すようになっていることが見出されている。一方、以上の検討からは、推量形式のもつ用法が確認要求用法に偏るようになった場合、推量の用法はどうなるのかということが疑問に思われる。第 6 章は、沖縄の若年層の方言を例にしてこの問題に検討を加えたところで、当該方言では、推量形式ダロウが確認要求用法を中心に使用されるのに対し、ハズという形式が推量用法を担っていることを明らかにしている。

第 3 部は、推量形式のとくに確認要求用法と丁寧さの関係について論じたところである。まず第 7 章では、東京方言において、本来的には丁寧形式であるデショウが、確認要求用法が主流となる明治・大正期以降、もっぱら普通体基調の文体で使用されるようになり、その丁寧さを下げていることが指摘され、その変化の要因として、確認要求という発話行為のもつ聞き手への無礼さが関わっていることが述べられる。また第 8 章でも、福島県郡山市の丁寧体推量形式バイが同じく丁寧さを失って確認要求用法を担っていることが指摘されるが、この場合には標準語のデショウが丁寧な形式として受容されたためという言語接触的な要因も考えられると述べている。

最後に、本論文の概要を述べ、その知見を研究史上に位置づけることによってまとめとされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語諸方言の推量形式の表す用法を、文献調査および臨地調査によって共時的、通時的に詳細に記述し、その変化の方向に共通したものがあることを指摘したものである。これまでの推量形式の研究には、ひとつの分析枠によって、通時的、通所的両側面から考察したものはほとんどなかった。

本論文は、推量形式の用法を「推量用法」「命題確認用法」「知識確認用法」の3つにわけ、調査の対象としたいづれの方言においても、「推量用法と命題確認用法」という「命題に対する話し手の推量」を基本にしたものから、「命題確認用法と知識確認用法」という「談話進行上の確認行為」を中心としたものへと移行しつつあることを明らかにすることに成功している。また、この結果とこれまでの文法化研究が得た一般化をつきあわせることによって、日本語諸方言の推量形式の用法変化には、文法形式の間主観化といった一般化を補強するところと、北海道内陸方言の推量形式が「驚きの表示」をも担うようになる例外を構成するところがあることを丁寧に整理している点も評価できよう。今後この分野においてまず参照されるべき、現時点でもっとも包括的な研究に仕上がっている。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、推量形式がもともと担っていた「推量」の用法を、その後各方言ではどのような形式が担うようになったのか、あるいはどの形式も担わないのかの記述は十分でない。また、確認要求用法の先には各方言でどのような用法が予想されるのか、推量形式の用法の移行はそもそも当該形式の衰退を意味するのではないかといったことの議論もほしいところである。その他、西日本各地の方言では推量形式の推量用法が衰えを見せないところが多く、標準語のダロウも書き言葉では衰退していくように見えない。より広範な目配りが必要なところであった。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、各方言の推量形式の使用実態を詳細に記述し、その変化の方向を明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。